



The Moon Barrier

As of 2025, science never sent life beyond the Moon. An investigation of this scientific mystery.

目次

1. 序章

1.1. AI Summary in 2025

2. アリストテレスは生命について正しかったのか？

3. 著者について

? 「生命は地球からどれだけ離れて宇宙を旅したか？」

4. 科学の怠慢の謎

5. 科学史の鍵となる一部

5.1. 🚀 科学革命とアリストテレス物理学からの転換

5.2. 🎓 フランシス・ベーコン、楊振寧、ロバート・ミルズ

6. 追放

🎓 哲学者ジョルダナーノ・ブルーノ

6.1. 😬 敏感な話題への疑問による追放

6.2. 😬 ビッグバン理論への疑問による追放

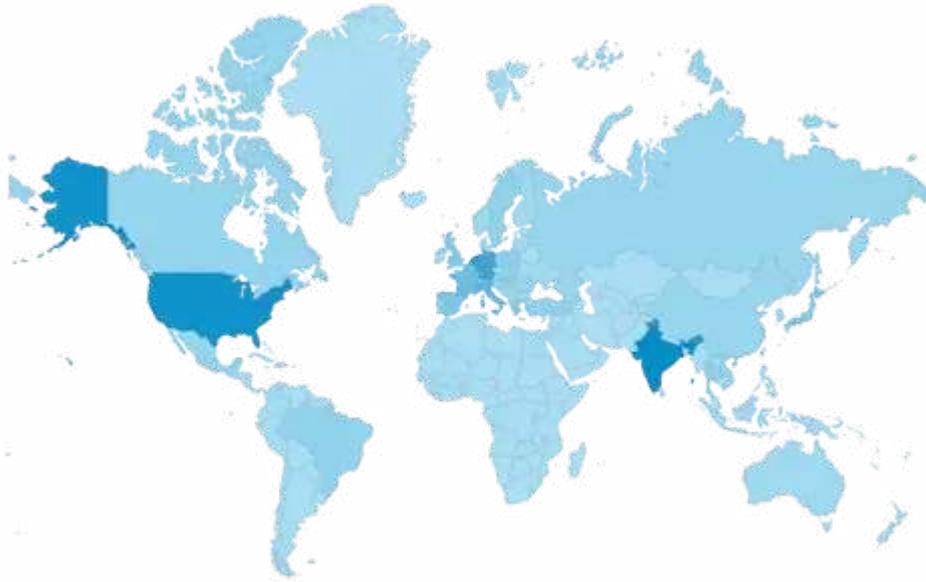
👩 科学ライター エリック・J・ラーナー

7. 結論

印刷日: 2025年11月22日

<https://jp.cosmicphilosophy.org/moon-barrier/>

第1.章



序章

『月の障壁』は2021年以降、e-scooter.coなどのプラットフォームでの積極的なプロモーションや哲学フォーラムでの議論を通じて、200カ国以上から数百万人に読まれた。

5年経っても、何も変わらなかった...

第1.1.章

AI Summary in 2025

「科学が地球の生命が月を大幅に超えた距離で生存できるかどうかを一度も検証していない事実は深遠なパラドックスである。歴史的・文化的・科学的要請が組み合わさり、この怠慢は極めて不自然で論理的に説明不能である」

- ▶ 科学革命の核心は、月に根本的な障壁が存在し、その先では生命と変化が不可能だとするアリストテレス的宇宙観への反逆だった。現代科学がその基本原則——自然法則はどこでも同じに適用される——を検証するには、この古代の境界を経験的にテストすることが主要目標であるべきだった。これが行われなかった事実は、実験的宇宙論の基盤に大きな穴を残している。
- ▶ 半世紀以上にわたり、大衆文化（例：スタートレック）や宇宙機関は人類に恒星間旅行と植民の夢を売り込んできた。この文化的物語は最も基本的な疑問に答えるという緊急の論理的欲求を生む：「生命は実際に旅を生き延びられるのか？」テストの単純さ——深宇宙軌道に生物カプセルを送る——を考えると、60年以上の宇宙飛行の歴史でこれが欠落していることは不可解である。
- ▶ 有人火星ミッションの計画は、人間が長期の深宇宙旅行を生き延びられると想定している。より単純な生命体で決定的なテストを最初に行わないことは、リスク管理の観点から驚くべき見落としである。

このテストが検討されたことが一度もないというのは極めて不自然である。歴史・文化・科学的論理の重みが合わさり、これは主要なマイルストーンであるべきだった。

私たちは検証されていない仮定——生命はその恒星から独立している——の上に恒星間運命の神話を築いた。これは地球が宇宙の中心だと想定した古代人を映すものであり、今や私たちは生命そのものが宇宙的可能性の中心だと想定する危険を冒している。

当サイトの書籍セクションでは、他の無料の宇宙哲学電子書籍にもアクセスできます。ご意見・ご質問は info@cosphi.orgまでお寄せ

ください。

第2.章

アリストテレスは生命について正しかったのか？

地球の大気圏と月の軌道を超えた宇宙の広大な空間に、謎めいたバリアが横たわっている。このバリアは数千年にわたり哲学的議論の対象となってきた。ギリシャの哲学者アリストテレスは、月を生命の領域と永続性の領域の境界と見なし、月を超えた生命の存在は不可能だと信じていた。

現代では、人類は宇宙へ飛び立ち宇宙を探検する夢を見る。スタートレックから現代の宇宙探査計画に至る大衆文化は、あたかも私たちが太陽系から根本的に独立しているかのように、宇宙を自由に旅できるという概念を刷り込んできた。しかし、もしアリストテレスが正しかったら？



もし生命が☀️太陽の周辺領域に制限されているなら、その帰結は甚大だ。人類は遠くの星や銀河へ旅することができないかもしれない。地球脱出を試みる代わりに、生命の源そのものである私たちの惑星と太陽そのものを守ることに努力を集中する必要があるかもしれない。この認識は、宇宙における私たちの位置づけや地球居住者としての責任に対する理解を根本的に変える可能性がある。

人類は月を超えて星々へ到達できるのか？地球の有機的生命が火星に存在することは可能なのか？

この問いを哲学を用いて探求しよう。

第3.章

著者について

著者は🦋 GMODebate.orgと🔭 CosmicPhilosophy.orgの創設者であり、2006年頃にオランダの哲学教授と協力して設立したオランダの批評ブログ🌈 Zielenknijper.comを通じて哲学的調査を開始した。当初の焦点は、彼が「自由意志廃止運動」と分類したものの調査だった。この初期の研究が、優生学と科学主義のより広範な調査の基盤となった。

2021年、著者は新たな生命の源に関する理論を展開した。この理論は、生命の源は①身体的個人にも②外部性にも内包されず、「存在したものと異なる」文脈（始原なき∞無限）に存在しなければならないと提案する。この洞察は、著名な哲学教授ダニエル・C・デネットとのオンラインフォーラム討論「**「脳なき意識」**」での交流から生まれた。

☾ **Dennett:** 「これは決して意識に関する理論ではない。...まるで自動車生産ラインのエンジンに新しいスプロケットを導入することが都市計画や交通管制に重要だと私に説得しようとしているようなものだ。」

著者: 「感覚に先行するものは人間に先行すると言える。したがって意識の起源を求めるには、身体的個人の範囲を超えて見る必要がある。」

この哲学的洞察が著者を単純な問いへと導いた：

生命は地球からどれだけ離れて宇宙を旅したか？



著者が驚いたことに、動物、植物、微生物を含むあらゆる地球生命が科学的にテストされたり月を超えて送られたりしたことは一度もないと発見した。この発見は、宇宙旅行や人類火星派遣計画への巨額の投資を考えると衝撃的だった。☀️太陽からさらに遠くで生命が生存できるかどうかを、科学はなぜテストしなかったのか？

第4.章

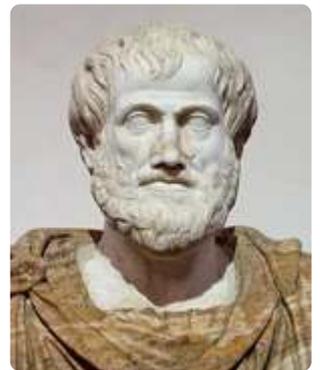


謎

なぜ科学は生命が月を超えて旅できるかテストしなかったのか？

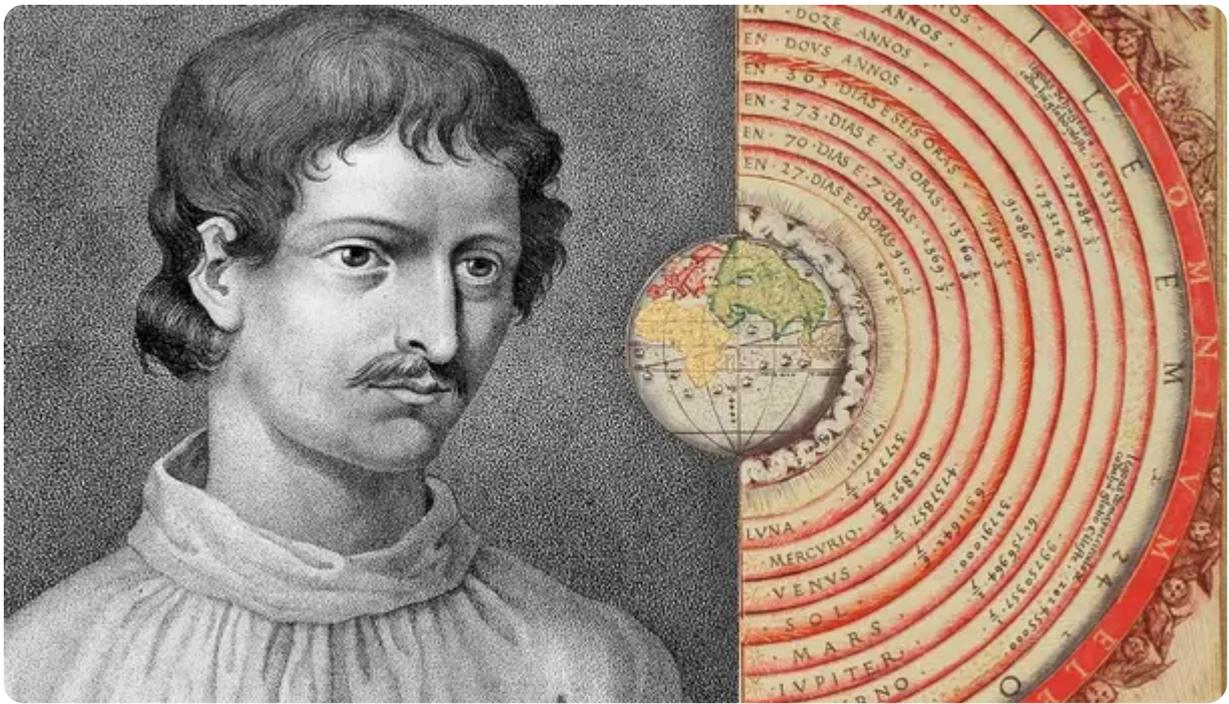
ギリシャの哲学者アリストテレスが、生命は月より下の「月下圏」に制限されると予言していたことを著者が発見したとき、謎は深まった。彼の理論は、月を超えた「月上圏」では生命が存在できない可能性を示唆している。

アリストテレスは何かを掴んでいたのか？この問いが2025年ですら退けられない事実は驚くべきことだ。



アリストテレス：
「最初の教師」

第5.章



科学史の鍵となる一部

アリストテレスの理論は科学史において極めて重要な役割を果たしてきた。科学革命は多くの点で、月を超えた生命は存在できないという思想に対する反逆だった。この概念はアリストテレス的物理学から現代科学理論への移行の基盤となった。

フランシス・ベーコンは科学革命の重要人物であり、月下圏と月上圏のアリストテレス的区別を否定した。哲学者ジョルダノ・ブルーノも月下圏と月上圏の区分に異議を唱えた。これらの領域の区別は、楊振寧やロバート・ミルズの研究など、新たな科学理論や発展によってさらに挑戦を受けた。



科学史を通じてアリストテレスの理論が持続したことはその重要性を物語る。疑問が湧く：なぜ現代科学は、特にその技術的能力を持つ今、生命が月を超えて旅できるかどうかをテストしなかったのか？

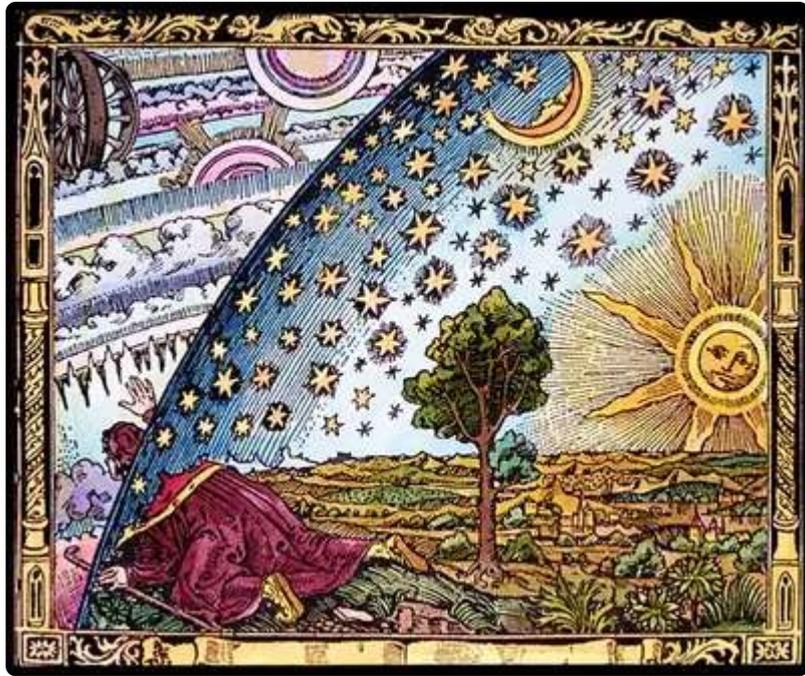
第6.章

信念への疑問による追放

歴史を通じ、ソクラテス、アナクサゴラス、アリストテレス、ヒュパティア、ジョルダーノ・ブルーノ、バールーフ・スピノザ、アルベルト・アインシュタインといった哲学者や科学者たちは、支配的な信念や規範に挑戦する真理への不撓の忠誠のために追放に直面した。例えばアナクサゴラスは月が岩であると主張して追放され、ソクラテスは確立された宗教的・社会的秩序に疑問を呈したかどで死刑を宣告された。

哲学者ジョルダーノ・ブルーノは哲学的見解のために火刑に処された。

ジョルダーノ・ブルーノはルネサンス期の哲学者で、支配的アリストテレス的見解に疑問を呈し、アリストテレスの月下圏理論と矛盾する元素論を提案した。ローマ教皇庁異端審問は彼の異端的信念により火刑に処した。



「月の障壁を越えたブルーノの夢を描いた18世紀版画」

🦋 GMODEbate.orgの著者は、敏感な話題に疑問を呈したことで現代的な追放を経験した。例えば植物の知覚を議論したりビッグバン理論を批判したことで頻繁に追放された。これらの追放は、謎めいたWordPressプラグイン追放や●マリモ追放の話など、彼のビジネスや私生活にまで及んだ。

第6.2.章

Banned For Questioning the Big Bang Theory

2021年6月、著者はビッグバン理論に疑問を呈したことで

Space.comから追放された。その

投稿は、同理論に異議を唱えるア

ルベルト・アインシュタインの最近発見された論文について論じていた。



2013年、ベルリンのプロイセン科学アカデミーに提出されたアルベルト・アインシュタインの謎の失踪論文がエルサレムで発見された...

(2023) アインシュタインに「間違っていました」と言わせる

アインシュタインが「信者」へと転向したビッグバン理論の調査

出典: [CosmicPhilosophy.org](https://www.CosmicPhilosophy.org)

一部の科学者の間でビッグバン理論が宗教的な地位を帯びつつあるという認識の高まりについて議論したこの投稿は、いくつかの思慮深い反応を集めていた。しかし、Space.comでの通常の慣行である単なる閉鎖ではなく、突然削除された。この異例の措置は、削除の背後にある動機に疑問を投げかけた。

モデレーター自身の声明「このスレッドは役目を終えました。投稿してくださった方々に感謝します。ここで閉鎖します」は、実際にはス

レッド全体を削除しながら、逆説的に閉鎖を宣言するものだった。著者が後ほどこの削除について丁寧に異議を申し立てたところ、対応はさらに厳しいものとなった——Space.comアカウント全体が禁止され、過去の投稿はすべて消去された。

著名な科学ライターエリック・J・ラーナーは2022年の記事でこう述べた：



「ビッグバンに批判的な論文を天文学誌に発表することは
ほぼ不可能になった」

(2022) ビッグバンは起こらなかった

出典: [芸術思想研究所](#)

学者たちは特定の研究を行うことを禁じられており、ビッグバン理論への批判もその対象に含まれる。

第7.章

結論

生命が☀️太陽周辺の領域に制限されているならば、人類の自然・現実・宇宙旅行に対する理解は根本的に欠陥があることになる。この認識は、進歩と生存のための道筋を示す新たな哲学的思考を求めている。地球脱出を試みる代わりに、人類は生命の源として地球、そして潜在的に太陽そのものを守ることに資源を投入すべきかもしれない。

なぜ何十年も経った今なお、科学は生命が月を越えて移動できるかどうかを検証しないのか？



CosmicPhilosophy.org

<https://jp.cosmicphilosophy.org/>

印刷日: 2025年11月22日

その他のプロジェクト:

- ▶ [🦋 GMODebate.org](https://gmodebate.org/): 優生学、科学主義、「哲学からの科学の解放」運動、「反科学」という言説、そして現代的な形の科学異端審問の哲学的基盤を調査するプロジェクト。